

IV 子ども読書活動推進のための様々な取組

実践① 社会福祉法人槌橋保育園 幼保連携型認定こども園 つちはしこども学園

1 はじめに

つちはしこども学園は、社会福祉法人槌橋保育園が運営する幼保連携型認定こども園です。天璋院篤姫ゆかりの地として知られる指宿市岩本に、昭和39年槌橋保育園として開園し、平成27年に幼保連携型認定こども園として再スタートするにあたり、「つちはしこども学園」と名前を変えました。今和泉島津家別邸跡地に隣接し、園舎前の海岸には当時を偲ばせる石垣や松林が広がります。園設立にあたり指宿市出身の槌橋秀彦氏からご支援をいただいたことから、園名を「槌橋保育園」としました。



2 親子読書会の発足

親子読書会は、開園から3年後の昭和42年に発会しました。親子読書会の一番のねらいは、『親子の心の交流』です。槌橋保育園の初代園長の堀口盛太郎は、教員を務めた後に指宿市立図書館に勤務していました。その頃に椋鳩十先生と繋がり、指宿市にも親子読書会を創ろうと尽力しました。後に保育園を開園してしばらくたった頃、椋先生の「幼児に本をよんであげましょう」という活動に賛同し、園児たちにも本を読んであげようと努力しました。その頃の絵本は凸版印刷の絵本が主流で、近隣では子どもに読んであげたい絵本は手に入りづらい状況でした。そこで、当時鹿児島県立図書館の館長を務められていた椋先生にご協力いただき、県立図書館の本をしばらくお借りして、それを子どもたちが各家庭に持ち帰ることにしました。数日間家庭で本を読んでもらったら、次の友達に廻していきます。しかし、この方法は図書館に返本する際の回収作業がとにかく大変でした。親子読書をすすめるうちに、「自分たちの本がほしい！」それが保護者、職員、そして子どもたちの共通の願いとなりました。「子どもの数だけ本がほしい！」という思いから、図書の預託制度を始めることにしました。子ども一人につき五百円、または、家にある絵本を預託する制度です。保護者の方をはじめ、たくさんの方にご協力いただき集まった資金を元に、鹿児島市内の書店で新しい絵本を買いそろえていきました。園長は賛同してくださる方々の思いに応え、自費で図書館を建設し、そこに絵本を保管し貸出を始めました。

3 親子読書会の主な活動

(1) 親子で絵本を読むこと

絵本を大人が読んで、子どもはそれをじっくり見て聞いて、親子での楽しい一時を過ごします。

(2) 読書会だよりの発行

毎月のおたよりで、絵本活動の様子やおすすめの絵本を紹介します。

(3) 親子読書会誌「ちねつ」の発行

読書会活動を通して感じたこと、子どもの様子やエピソード等を綴る文集です。

(4) 親子絵本づくり

子どもたちが描いた絵に沿って話をつくり、世界に1冊しかない絵本を作ります。

遊びました。セロファン紙で赤や緑の眼鏡を作って眼鏡を通して見える赤や緑の世界も楽しんでみました。

て、大笑い！お気に入りでした。「○○ちゃん・くんは何がすき？」と終わった後もやり取りができる楽しい一冊でしたよ。



【読書だよ】園での読書活動の様子

◆ 親子絵本作り ―子どもたちが表現する世界へ―

毎年読書週間の時期に親子手作り絵本の製作を行っています。子どもたちが描いた絵に、親が言葉を添えて、最後に好きな模様の布や和紙などを使って製本し、世界に1冊しかない絵本の完成です。毎年1冊ずつ増えていくこの手作り絵本に、ご家族からのメッセージと写真を添えて、園で大切に保管しています。そして、子どもたちが立志式を迎える年のクリスマスに、プレゼントとして子どもたちの手元に届けます。心が揺れ動く思春期、この絵本は自分のために心をくだき、時間をかけてくれた人がいた証として心の支えになってくれるようお願いしています。



◆ 読書会誌『ちねつ』



保護者と職員、そして子どもたちみんなで作る文集です。年に2回発刊しています。1冊目は会員みんなで、2冊目は卒園生が中心の構成になっています。内容は一年間の読書活動を通して感じたことや子どもたちの成長の様子や喜び、家族の楽しいエピソードなど、いろいろと寄せられています。また、文集の表紙やページのあちこちには、子どもたちが描いた挿絵を添えてあります。絵本に登場するキャラクターや動物たちが登場し、味のある作品が楽しい文集に仕上げてられています。毎年のように反省の声も聞かれますが、子どもたちのためにひたむきな努力を重ね、日々奮闘する人たちの楽しいお話がいっぱいの会誌です。

4 親子読書会誌『ちねつ』に込めた思い

絵本を読んであげたから頭が良くなったり、思いやり溢れる子になったりするなどという急激な変化はありません。でも、親から本を読んでもらった経験を通して感じた心の温もりは、子どもの心の底でそっと温められ、成長した後もずっと変わらず残っています。それが少しずつぬくもりを増してきたら、そこから芽が出て、そして双葉をのぞかせるでしょう。親から伝えられた、親が心に残した種は、ずっとずっと後に芽を出し、それがまた、その次の子どもへと引き継がれていくのです。そんな思いから読書会誌は「ちねつ」と名付けられました。

5 おわりに

子どもたちの心の底に植えられた種が、いつか発芽の時を迎えられますように…。種から芽が出るかどうかは、その種が発芽しやすい適切な時期に蒔かれ、その種がおかれている環境によって変わります。「ちねつ」にこめられた思いのように、親によって蒔かれた種が、ゆっくりと温められて芽を出し、花を咲かせ、そして更に次の世代にも新しい種を残していけますように。実りある未来を信じて、私たちは心を温める活動をこれからも続けていきます。

貸出の用意をして持ち帰ります。 手作り絵本の中は…



木曜日は絵本の貸出日
登園時に親子で絵本を選びます。



2歳の頃の作品



クラスでも毎日絵本を楽しんでいます。